

マタイによる福音書5章6節 「義に飢え渴く者」

1A 神の恵みによる救い

2A 果実としての幸い

1B 幸いを第一とする世

2B 幸いを第一とするキリスト者

3B 神ご自身とその関係

3A 義の意味するところ

1B 外面的な義

2B 罪からの解放

1C 罪の力からの解放

2C 罪の欲望からの解放

3B 神とキリストを知ること

4A 飢え渴き

1B 絶対的な必要

2B 満たされる約束

1C 神の賜物

2C 継続する恵み

3C 絶対的な成就

4C 御国の到来

本文

マタイによる福音書の山上の垂訓シリーズです。今日は、八福の四つ目の幸いです、「マタ 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。」

1A 神の恵みによる救い

イエス様は、大勢の群衆が付いて来て、そして弟子たちもおり、弟子たちを近くにおらせて、そしてご自身が座られて教えられました。それは、天の御国、あるいは神の王国の姿です。当時のユダヤ人は、ローマの圧政に苦しんでいてローマからの解放を熱望していました。ところがイエス様が教えられたのは、そのような環境の変化や解放ではなく、「自分からの解放」を教えられました。心の貧しい者は幸いである、という言葉から教えられました。自分はもうだめだ！と神に出会った時に、自分に対する圧倒的な絶望感に襲われます。そして、悲しむ者は幸いです、とあります。自分の罪ある姿に悲しみます。また罪というものを悲しむようになります。そして前回は、柔和な者は幸いです、とありました。これは、へりくだった者と言いかえることができますが、そのように低められた自分がいて、それで他の人々と接するという姿勢です。また、誰かに悪いことをしても、仕

返しをせず、主に裁きをお任せする姿でもあります。

このように、神に出会う自分自身の姿がから始まり、そして対人関係、対外関係へと、少しだけ外に向かっています。そして今日は、「義に飢え渴く者」ということを見ます。ここでは、自分自身に何も良きことがないことを知ったからこそ、自分ではなく神から来る義の賜物を強烈に求めている姿であります。こうして、イエス様は、神の恵みによる救いを教えておられます。自分自身は救いのような存在であり、けれども、神が一方向的に憐れんでくださり、キリストの死と甦りによって私たちを生かしてくださったという恵みです。

2A 果実としての幸い

1B 幸いを第一とする世

イエス様が、「幸いです」という言葉を使われているのですが、私たちの心の奥底では誰でも幸いを求めています。けれども、イエス様は「～は幸いです」と言われて、幸いというのは、それ自体を求めるものではなく、ある状態に伴う果実なのだということを教えています。ここでは義に飢え渴く者は幸いであると、義に飢え渴いているなら、それで幸いが得られるのです。

けれども、私たち人間はどうしても、幸いを先に求めています。幸いを得るために、世界も全てが回っています。私たちも、幸せな家庭を築きたい、幸せになるためにこれをして、あれをして、となっています。けれども、幸せをそれを目的にして求める時に、幸せには決してなれません。必ず不足が出てきます。その幸せはいつまでも続くわけではなく、一時的なもので、もっともっと焦燥感だけが募ります。

2B 幸いを第一とするキリスト者

キリスト者として、自分が正しく生きるということよりも、幸せとを感じるものを得ようと思って、勘違いしてしまうことがないでしょうか？教会や、キリスト教の中において、幸せを求めて、例えばこの活動をして、あの活動をする。あるいは、教会において、神が何を求めているのか？ということではなく、自分が幸せな気分になることが動機で、何か得る事だけを求めている。集会から集会へ周り、教会から教会へと回ることもある。私たちの目的は、主を知り、何が正しいことかを知り、それに聞き従うことが主たることです。

3B 神ご自身とその関係

そしてその中にこそ、実は幸せが隠されています。神が正しい方であり、この方に全てを任せ、この方と正しい関係を持っていることこそが、平安があり、静まることができます。

3A 義の意味するところ

主が、ここで「義」について語っておられますが、この主題は山上の垂訓で後でも出てきます。例

えば、パリサイ人や律法学者の義にまさらなければ、天の御国に入ることにはできないということであつたり、また神の国と神の義を第一に求めなさいというところにも出てきます。

1B 外面的な義

義とか、正義という、普通の世界では社会的なことを思い出すでしょう。社会正義とも言います。誰かが罪を犯した時にそれをどのように罰するのか？貧富の差がある時に、どのようにその格差を埋めるのか？そして世界であらゆるところで、不条理なことが起こっています。戦争の噂を聞いたら、戦争をしてはいけない！という平和を叫ぶ声もあります。しかし、イエス様は地上に來られた時に、これらのような正義を説き明かされませんでした。まさに今、ユダヤ人たちはローマの圧政に悶え苦しみ、ローマに対する正しい裁きをメシアがしてくれるものだと思って期待していました。しかし、イエス様はそれらのことを言われませんでした。あくまでも、神の義と、そして神と正しい関係を持つことを解き明かしておられました。

また道徳的なことを正義と呼ぶこともあります。これらの問題が起こっているのは、何々が原因だからこうなっていていけないのだという道義的なことを話しますね。そして義に飢え渴いているのですから、それを正そうとして動き回ります。そういった人がいると、実は周りの人が迷惑千万と言う時が多いのです。なぜなら、そこに解決があるのではないことは明らかなのに、何か外側に問題があると思って動き回って、かえって問題を複雑にしていく、こじらせて行くことが多いからです。

2B 罪からの解放

しかし、イエス様は徹底して「自分というものからの解放」を教えておられます。ここでは、「罪からの解放」です。神との関係において、罪こそが神と私たちの仕切りとなっています。ですから、自分が罪というものからどれだけ自由にされているのか、そのことを強く願い、切望し、飢え渴いているというのが、ここで話していることです。アダムが造られた時には、神との正しい関わりがありました。そこから罪を犯したことによって、外れてしまいました。曲がってしまったと言ったらよいでしょうか。そのために、神からの義の賜物を強く欲します。罪から解放されて、神と正しい関係の中に入りたいと願います。

1C 罪の力からの解放

そこで、自分が罪の力からの解放を願います。自分の圧倒的な罪深さに気づいていますから、そこから出て行きたい、その力からの解放を願います。ローマ 6 章から 8 章前半までに、罪の力からの解放について書いてあります。罪に対して死んだ私たちは、罪から解放されているとみなしなさい。自分の手足を、義の器として捧げなさい、という命令がありました。けれども、7 章で自分がしたいと願っている善をすることができず、かえって悪を行ってしまうという葛藤を読みました。けれども、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から私たちを解放しましたという約束があります。御霊に従うことによって、肉の行いを殺すことができます。

2C 罪の欲望からの解放

けれども、私たちの願いはそれだけに終わりません。罪の欲望そのものからの解放も強く願っています。「御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだに贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。(ローマ 8:23)」私たちは今、罪から解放されています。罪から来る神の怒りから解放されています。そして、罪の力に打ち勝つ聖霊の力も与えられています。けれども、そこだけに終わらず、罪の欲望そのものがなくなってほしいと願います。自分がその罪を未だ好んでいて、犯したがっている事実があります。聖霊による自制によって、それを犯してはいないけれども、そういった欲望がまだ残っています。そこから解放されることを、心の中で呻いているのも、義に飢え渴いていることです。

3B 神とキリストを知ること

ただ、罪からの解放という言葉を使うと、まだ消極的です。積極的に清くなりたくないと切望することも、義に飢え渴いていることです。「1ヨハネ 3:2-3 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」キリストを見る、キリストを知るという強い願いです。聖霊に満たされて、実を結ばせ、キリストに似た者になりたいと願う強い思いです。その中でキリストとの交わりを強く願います。「3:8-11 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。それは、私がキリストを得て、キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

4A 飢え渴き

1B 絶対的な必要

このように、義について見てきました。次に、「飢え渴く」という言葉をもっと見て行きたいと思えます。これは、一生懸命、自分の努力によって義に到達するというものではありません。むしろ、その反対です。絶対的に、自分は義に到達できようがないという無力感から、全く神の憐れみによって、義の賜物が与えられるように切望するということでしょう。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ、私のたましいはあなたを慕いあえぎます。(詩篇 42:1)」鹿が慕いあえいでいます。同じように、自分には全くないので、それで義についての全てを神に求めるということです。放蕩息子のことを思い出してください、彼は、遠い国で全ての財産を使い果たし、豚の世話をして、餌となっているイナゴマメも食べたいほどであった時に、我に返りました。そして父のもとに帰りました。全く自分には何もなくなったと知っているからこそ、神からの義に飢え渴いているのです。これこそが、信仰

による義です。先のピリピ書にあるように、そこまでの飢え渴きがなければ、まだ自分自身で何とかしていけるという思いがあるからです。

2B 満たされる約束

そして、約束は、「**その人たちは満ち足りるからです。**」というものです。これは言い換えると、「飽き足りる」ということでしょう。飢え渴いている者が、飽き足りるほど満ち足ります。主はご自分のところに近づく者に、惜しみなく恵みを注がれます。

1C 神の賜物

まず、義は賜物であり、飢え渴きをもって神のところに来た時に、そのまますぐに義の賜物で満たしていただきます。「3:21-24 しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」キリストを信じる者には、この恵みによる義の賜物に満ちあふれます。キリストの義を自分のものとして身にまとっています。もはや、自分はキリストの中にある者であって、神が私たちを見る時に、キリストに結ばれた者として、全く罪を犯したことのないようにみなし、キリストと同じようにみなされるのです。

2C 継続する恵み

けれども、主は、その後も私たちを満たし続けてくださいます。聖霊の働きによって、罪の力と汚れから私たちを解放するみわざを始めてくださいます。このことにも、飢え渴きを持っているならば、主は満たして下さるのです。私たちは、聖霊の働きはただ求めればよいのです。イエス様は、求めれば与えられると言われましたが、問題は求めていないことです。飢え渴くほど切望していない、自分がそこまで何もないと気付いていないということになります。「3:16-18 しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

3C 絶対的な成就

そして、最終的に全てに満たされるようになります。主イエスが来られる時に、私たちの体そのものが朽ちるものから朽ちない者へ、卑しい肉体から栄光の体へと変えられます。「3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」そして、テサロニケ第一

5章でも、こう約束されています。「5:23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいませ。」

ここで大事なことは、矛盾するのですが、「すでにキリストにあって満たされているのに、これから満たされることを求める」ということです。すでにキリストにあって完全な者となりました。しかし、その完全なものの全てを私たちが得ているわけではないのです。完全な者となっていないので、それを捕らえるために一心に走っているのですが、しかし既にイエス様に捕えられています。義の賜物で満ち足りている者が、満ち足りるべく願い求めます。

4C 御国の到来

そして最後に、義に飢え渴くというのは、単に自分自身の体だけでなく、全ての被造物の解放も含まれます。「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。(ローマ 8:21)」イエス様が、御国が来ますようにと祈りなさいと言われましたが、まさに被造物が解放され、地上全体が神の支配に入ることです。